

# 司祭紹介

## 大阪教区に来られた司祭を紹介します

### アマド・カバレロIII神父



出身地 フィリピン ケソン市  
生年月日 1966年11月2日  
所属 聖ヴィンセンシオ・ア・パウロ 宣教会  
司牧担当 甲子園教会(主任)

### ホセ・ラモン・ルビオ・モルデンハウエル神父



出身地 スペイン  
生年月日 1980年11月9日  
所属 スペイン マドリド教区  
司牧担当 玉造教会(日本語研修)

### ジョンソン 鄭海成神父

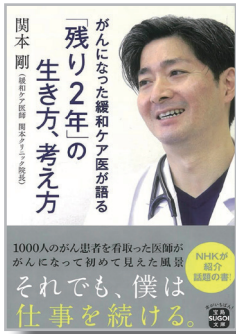


出身地 韓国  
生年月日 1984年2月21日  
所属 韓国 ソウル教区  
司牧担当 堺教会(日本語研修)

### シンソンギル 申城吉神父



出身地 韓国(ソウル)  
生年月日 1969年12月19日  
所属 フランシスコ会  
司牧担当 大阪生野教会(主任)



英隆一朗神父から  
この一冊

司牧者がリレー形式で若者たちにぜひ読んでほしい書籍を紹介し、青年たちの読書感想文を掲載する連載。今回は、英隆一朗神父(六甲教会)が担当。



「がんになった緩和ケア医が語る『残り2年』の生き方 考え方を続ける」(関本剛著、宝島社、2020年9月発行、税込 1,320円)

私が昨年春、六甲教会に赴任して最初の仕事で、この本の著者の通夜・葬儀であった。彼は学生時代、教会活動や神戸の震災復興ボランティアに精力的にかかわっていた。その彼が医者となり、ターミナルケアにかかわっていたところ、がんの告知を受けた。余命2年の時に執筆したのが本書である。自己の死を受けとめ、最後まで仕事と家族を大切に生きる生き方が淡々と記されている。

死期が近い患者で、とてもわがままな人がいた。彼が、自分も余命2年だと伝えると、わがままな患者の生き方が劇的に変わったというところは、泣けてきた。

彼の死を受けとめる態度は多くの人に励ましと力を与えている。

私たちがどう生きるかを考えるとき、どのように死んでいくかをセットで考えるべきでなからうか。自分の生を見つめ直すために、本書を通して、自分の死を一度見つめ直してほしいと思う。

彼の葬儀では、事前収録したビデオメッセージが流された。現在でも、YouTubeで視聴できる。関連動画もたくさんアップされているので、こちらだけでも見てほしい。

ちなみに、私の赴任1年後、彼の妻と息子に洗礼を授けることになった。いのちのつながりを今でも強く感じている。

次回は、ジャンマリー・カゼンガ神父(堺ブロック)です。



関本 剛さんのお別れの挨拶  
◀ここから読み取りできます



## ラジオ 信仰の時間

### 正しい軌

7月担当(7月9日放送分)



ジョヴァンニ・デア神父 (尼崎教会)

子どもたちは、しばしば大人たちに「なぜ？」と問いかけて困らせることがあります。ハイデガーという有名な哲学者は、自分の弟子たちにこう言いました。「哲学も宗教も進歩したいなら、子どもに質問されなさい。いつも答えが出るとは限らないが、必ず真理に近づくことができる」。このハイデガーの言葉は、イエス・キリストの「神は幼い者に真理を解き明かす」と言った通りです。子どもの質問は素朴で奥が深いです。実は、大人たちが「答えを探すのは無駄だ」と、考えることもやめてしまった問いもあるかもしれません。大人は社会の事柄を深刻に考えることに気をとられています。しかし、本当に大人が考える問いは、子どもの質問よりも深刻でしょうか。

子どもが問いかける一つの例として、「謙虚さとは何か」という難しい質問がありました。謙虚になるということは、自分を卑下すること

でも、自分を消し去ることでも、姿を消すことでもなく、自分の本当の姿を認識することです。謙虚とは創世記に書いてある通り「あなたは土からとられたのだから、あなたは、ちりに帰る」。を忘れないことです。このちりである人間に神様はいのちを与えられました。人間はちりに過ぎないものです。この点を理解するために、一つの例話を挙げます。

むかし、ある神父は神様によく仕えていました。この世で自分くらい神様を敬愛している者はいないと自負するほどでした。神様は彼の心を見て、こう言われた。「神父よ、川沿いのあの町へ行きなさい。そこで私を信奉している1人の男に会うだろう。彼としばらく暮らさなさい。多くを学ぶだろう」。

神父が会った男は農夫でした。彼は朝早く起きて、一度神様の名を唱えました。それからスキをかついで出かけ、一日中畑で働きます。そして夜になり、床につく前にもう一度、彼は神様の名を唱えました。彼を見た神父は思った。「この田舎者がなぜ神の信奉者なのだ。ただ一日中、畑仕事に没頭していただけないか」。そこで神様は神父に言われた。「器に縁までミルクを満たし、それを持って町をひとめぐりしなさい。一滴もこぼさずにもどってきなさい」。

神父は神様の言われた通りにしました。彼が帰ってから神様は訪ねられた。「町を一巡りしている間、幾度私のことを思い起こしたか」。彼は答えた。「神様、一度も。一滴もこぼさないよう注意をしていたのですから、一度も……」。神様は言われた。「こぼさないように注意を器に集中して、お前は私のことをまったく忘れてしまった。ところがあの農夫はどうだ。家族を養う責任

を背負いながら、毎日、日に二度、私を思い起こしている」。

この例え話は、神様が謙虚さを強くすすめていることをあらわしています。神様はよく勉強した人の頭の中で話しをするのではなく、清い人の心でよく話しをします。神様は勉強して地位や名誉を得てえらくなった人にだけ話をすることはありません。社会の地位はバラバラでも、私たちの心は同じレベルで、みんな平等です。神様は私たちの心を見て話します。

この例え話には、もう一つ大切なポイントがあります。私たちはみんな人生の中で、それぞれ重荷を担っています。だからイエス・キリストは「わたしは柔和で謙遜な者だから、私の轆を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。私の轆は負いやすく、私の荷は軽いからである」と言われました。

轆がなければ畑を正しく耕すことができないように、道徳的な基準がなければ正しく生きることができないからです。人生において、まっすぐ進むためには、道徳的な轆が必要です。時どき重荷になりますが、持って行けば人生に豊かさも与えられます。今日もイエス・キリストから学び、私たちが轆を負い謙虚でいることができるように努力して過ごしましょう。

毎週日曜日 5:50~6:00AM 放送

9月担当: エリック・パウチスタ・デグスマン神父

ABC ラジオ(朝日放送) AM1008/ FM93.3  
スマホアプリの radiko でも聴けます。